

虹

理科の先生は魔女

155 本質に迫る子どもを育てる



子どもたちに意見を求める三井さん

148歳。年齢を尋ねると、三井早苗さん(みついきなえ)はそう答える。「本当は？」と質問を繰り返せば、68歳と渋々明かしてくれる。

魔女を自称する。ゆるくパーマがかかった髪を部分的に緑色に染めている。お手製のガウンは真っ黒。魔女と言えば魔女だ。

小学生を対象にした塾を富山市の自宅2階で主宰する。その名も「マジョリカ実験学校」。魔女による理科の学校という意味だ。文科省の学習指導要領に沿って、植物や生き物を観察したり、電流が生み出す力を調べたりする。設備は小学校の理科室以上。顕微鏡は中学校レベル。ピーカーも試験管の数も豊富だ。実験器具どころか、授業を受ける児童全員分の国語辞書も備える。

「思考するのは日本語。辞書を引くと知識と知識がつながり、好奇心を呼ぶ。点取り虫ではなく、人間を育てているんです」

年齢を80歳もごまかすのには理由がある。「大人や教師は嘘をつくと知ってほしい。真実かどうかを判断するのは自分。学問のスタートは疑問を持つことでしょう」

三井さんは小学校の教員だった。2014年、定年退職を機に塾を立ち上げた。理科だけの塾というのは珍しい。「理科の理は、論理の理。筋道を立てて考え、確かめる教科です。実験すれば目の前で結果が出る。教師の権威なんて関係ありません。何より楽しいでしょう」と熱っぽく語る。

その言葉通り、考え方の本質に迫る指導が評判だった。しかし、来年3月にいったん幕を引く。惜しむ声は多いが、「もう体がボロボロなのよ」。

若かりし頃は、海洋生物の研究をしたかった。イルカと泳ぎたかったからだ。しかし、家はそれほど裕福ではない。当時は教員になれば奨学金を返還しなくてもよかった。美人で大好きな母も小学校の教員だった。仕方なく教員を志した。

大学では理科教育を専攻した。授業で着る白衣がまぶしく見えたからだ。教師が結論を与えず、児童自身に探究させる発見学習の第一人者に師事した。子どもの主体性を育てようとする姿勢に共感した。

初任地は魚津の小学校だった。当時の校長は熱心で、レポートにみっちり赤字を入れてくれた。先輩教員もかわいがってくれた。何よりも、児童が理解を深める場面に立ち会えることにやりがいを感じた。

初めての学習参観では「気温の測定」を取り上げた。日なたと日陰で気温が違うか、児童に議論してもらった。「実際はどうか確かめてきて」と水を向けると、皆一斉に外に飛び出した。教室には親と自分が残された。視線が痛かったが、率先して確認する児童の姿に「よしよし」と思った。これこそ、大学で学んだ発見学習の精神だった。

25歳で見合い結婚し、3カ月で別れた。家庭に収まるタイプではなかった。「母親が花嫁姿をどうしても見たいって言うから。でも向いてなかった。学生のうちに大恋愛しておけばよかった」

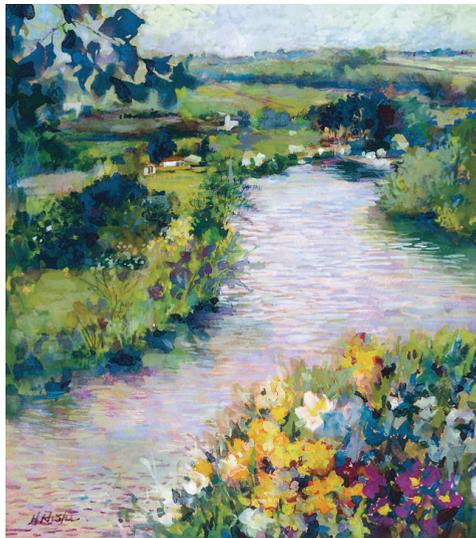
魔女になったのは20年ほど前だ。お気に入りの赤いワンピースを、ある男子児童から酷評された。「何なら似合うの？」と尋ねると「ヤンキーの格好」と言われた。

その晩に、衣料品チェーン店で背中にドクロのマークが入ったシャツを買った。翌

と魔女でいい。魔女のコスチュームはユニホームになった。ある日、年齢を聞かれた。口から出せば「129歳」と答えた。キリのいい数字だと真実味がない。

荒れていたり、発言がほとんどなかったり。さまざまな問題があるクラスを担当してきた。それでも立て直してきた。やんちゃな子どもがいれば、全力で一緒に遊んだ。押さえつけるのではなく、向き合えば信頼してくれる。そんな信念があった。

対立をいとわず、上司にも、同僚にも、保護者にも言うべきことを言った。購入を認められない教材は自腹を切っても買った。熱心な姿勢を支持してくれる同僚もいたが、中には疎ましく感じる人もいた。「子どものために」と言えば、「またそれですか」と言われた。出世には縁がなかった。関係があるはずの会議に呼ばれないなど、嫌がらせを受けることもあった。



「岸辺の春」西治子

日、それを羽織って教室に入った。シャツには白色のジャージのズボンと真っ赤なビーチサンダルを合わせた。髪をカーラーでクルクルと巻き、口紅も派手な色にした。その姿を見た児童たちは喜んだ。今度は、当時流行していた「コギャル」の格好を提案された。セーラーカラーのブラウスに袖を通し、ルーズソックスを履いた。面白半分で仮装したわけではない。教師が児童の声に耳を傾ける存在だと伝えたかった。

その次は魔女に扮した。三角の帽子をかぶり、全身黒ずくめ。おもちゃの杖を持って登場した。隣のクラスの児童も見物にきた。ヤンキーの格好を薦めた男子は「先生、もういいよ。ありがとう」と言ってくれた。

「たかが服で思いが伝わる。それならず

先輩教員で同じ学校に勤めたことがある草野和子(かずの)さん(72)は「三井さんには子どもの挑戦心を育てようという強い信念があった。思ったことをはっきり言うから、ぶつかる人もいたでしょう。普通の人なら揺らぐところも、彼女は違った。学校という組織が才能を生かしきれなかったのは、もったいなかった」と評する。

教師人生の終盤は担任としてクラスを受け持つことはなかった。それでも児童からは慕われた。離任することになった学校では、児童が大挙して校門まで見送りにきた。研究発表のため、かつての職場を訪れると、児童たちがひと目姿を見ようと押し寄せてきた。「偉くはならなかったけど、幸せだな」と思った。

60歳。定年退職の翌月に塾を開いた。自宅を新築した時、「いつか塾を開くかもしれない」と2階は壁や仕切りのない広々とした空間にしていた。退職金は実験用の器材に費やした。「普段の生活は慎ましい。でも必要ならパッと使っちゃえばいいんです」。最初の生徒は1人。それが口コミで評判を呼び、徐々に集まってきた。誰にも口を出さず、理想の教育に打ち込める。最高の環境だった。教える知識を磨こうと、塾の傍ら、東京の大学院にも通った。

長野県塩尻市の高校1年生、小川真瞳(まなと)さん(16)は、富山にいた小学3年から5年生にかけて塾生だった。初めて塾を訪れた時は黒ずくめの三井さんを見て「ヤバイ」と思った。でも、すぐに信頼できる先生だと確信した。「一つ一つの実験が学校と違って深い。多面的な見方を教えてくれた」。筋肉の仕組みを学ぶ授業が印象的だった。フライドチキンが配られ、関節を曲げ伸ばしして観察させられた。衝撃的だった。長野に引っ越したが、最近塾に遊びにいった。塾は愛すべき母校になっていた。

良い理科教育には良い教材が必要だ。畑は教材の宝庫だ。花や野菜を育てれば、虫も集まる。それら全てが子どもたちにとって上質な教材だった。

しかし、教員時代に児童と全力で駆け回ってきたからか、三井さんは膝の関節を痛めていた。手術しても元通りにはならない。畑仕事は医師に禁じられた。理科は教材が命。畑がなければ用意できない。実験学校の看板を来年3月に下ろすと決めた。

塾自体を閉じるつもりだったが、知人から「もったいない」と引き止められた。理科でなくても、算数や国語につまずく子どもがいる。その力になったらいいと勧められた。世の中には他にも塾があるから、自分に需要があるという確信はない。でも、「子どもが成長する瞬間に立ち会える仕事は他にない」とも思う。

やっぱり魔女はやめられない。子どもたちのために、使える魔法はまだある。

授業中は黒い服を着ている三井さんですが、私生活では明るい色の服を好んで着ているそうです。たまに魔女らしくらぬ発色のいい鮮やかな服を着ていると、子どもたちに文句を言われるようです。魔女狩りという言葉があるように、魔女とされた人が迫害された歴史もありますが、三井さんは愛されていますね。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121~140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたまのエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は4月1日(金)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社営業局